

第5章 吉住池にかかる民俗

水口あけ

吉住池の水口あけのまつりは、1月11日に神崎郡五個荘町大字奥集落が行っている。

朝10時頃 奥集落の役員は酒一升と大注連縄(しめなわ)を青竹の先にかざして八日市市建部下野町集落に立寄って挨拶をした後、吉住池の樋門(ひもん)の一つである奥村のゆる(別称「下のゆる」ともいう)に行き、樋門口に大注連縄を飾り、酒一升を供えて拝む。

この大注連縄は、太さ70cm、直経3mの輪型で、当日朝に惣役員が出て作り、吉住池の水神に供えて生活用水と灌漑用水が豊かであるようにと祈る行事である。

井元の神のまつり

吉住池は湧水の沢である。この沢の上流に「市の湯(いちのゆ)」とも「浜野沢(はまのざわ)」とも呼んでいる湧水の沢がもう一ヵ所ある。この沢から流れ出る川を今井川といい、水利権は吉住池の下流郷である五個荘町大字奥集落・八日市市建部下野町集落・同市建部大塚町集落が持ち、三集落の生活用水と灌漑用水に使っている。この沢の水神様をまつる行事があって、これを「井元の神」のまつりと呼んでいる。

まつりは、1月11日朝9時頃、三集落の惣役員が揃い、酒一升と大注連縄(太さ約80cm・長さ約3m)を持って市の湯(浜野沢)に行き・沢の岸に酒を供え、岸に生えている木の枝に大注連縄を掛けて拝む。

昭和55年、耕地整理で市の湯は水田となったが今井川は残り、今井川岸に「井元の神」の石標を建て、今もこの行事は続いている。

また、市の湯の徳水集落である八日市市建部日吉町では、市の湯を水源とする「サザ川」の川普請を5月8日のお月ようかの日に惣総出で行っていたが、昭和55年の耕地整理以後は愛知川ダム用水の通水で廃止された。

さらに八日市市建部瓦屋寺町も四月初旬に川普請を行っていたが、これも廃止している。

日吉町と瓦屋寺町は井元の神まつりには参加していない。

ゆるがえ普請

「ゆるがえ」とは、吉住池をさして呼ぶ集落と、吉住池にある四ヵ所の樋門(ひもん)をさして呼ぶ集落とがある。

ここで「ゆるがえ普請」と呼ぶのは、樋門口の土砂さらえと補修のほかに、取水の水量割りをする土俵を埋める作業である。

この作業は、5月5日朝8時頃、吉住池の堤に6ヵ集落民が集まり土俵15俵を作る。

六ヵ集落とは、吉住池の水利権を持つ下の郷六ヵ集落で、八日市市建部大塚・建部下野・神

崎郡五個荘町大字伊野部・平坂・木流・奥集落である。

15俵の土俵は、伊野部用水の樋門口に四俵。伊野部・平坂・木流の三集落用水の樋門口に6俵。建部大塚・建部下野の二集落用水の樋門口に三俵。奥集落用水の樋門口に2俵の水かがりによるもので、耕作面積の割合である。

この土俵埋めのほかに、明治中期頃までは、各樋門口の土砂ざらえや堤の修復など行つたと伝えられる。今は伊野部公民館に六ヵ集落の役員が集合して土俵作りをしたあと樋門口に沈める行事だけになっているが、吉住池改修工事で、昔日のような湧水現象が出たら、ゆるがえ普請の復活が見られるだろうと地元民は期待している。

ゆるがえの杭打ち

ゆるがえの杭打ちとは、吉住池と今井川の境界に漏水防止用の松杭を打つ川普請である。

これをするのは、神崎郡五個荘町大字奥集落で、5月5日朝8時頃 惣中総出で吉住池東岸に参集。今井川の下流から上流の市の湯(別称浜野沢)にかけて歩き、吉住池と今井川の境界にそって松杭を打ち、松板を側溝に張り、川の水が沢に漏れないようにする。また。今井川の川底の土砂ざらえも行う。この行事は、昭和55年の耕地整理と昭和58年の吉住池改修工事完成によって廃止された。

速恵さんのまつり

速恵さん(そえさん)とは、吉住池の東北の隅にまつられている神で、龍神さんといわれている。この場所は池の中で雑木と雑草が茂る小さな丘であり、社の建物はない。

お社は、八日市市建部日吉町集落内の郷社日吉神社本殿東側にある小社三社の中央部のお社で、これが「速恵六明神」といわれていて、7月25日にお祭をしている。

この祭は、吉住池を共有する八日市市建部日吉集落・建部田中集落・建部竹鼻集落の三集落で、朝10時頃、氏子総代・区長・副区長・若衆大頭(おおがしら)・農業実行組合長・老人会長らが参列し、神職が祝詞を奏上する。供物に鯉・玉子・野菜が供えられ、三集落の老人会員が招待されるほか、終日、日吉郷の惣中が参詣する。

速恵大明神のお姿を見た話が伝わっている。

明治初期に速恵の森近くで肥料用の草刈りをしていると、大蛇が出現。目を光らせて怒ったので、以後、毎日玉子を供えて怒りをしずめたといわれる。明治末期頃には、速恵の森に玉子を供える習慣はなくなり、日吉神社境内の速恵大明神の小社に供えるようになったが、今はこれもなくなっている。

野の神のまつり

吉住池東岸に八日市市建部日吉集落の野の神の斎場がある。この野の神の斎場を別称「ダイジョウゴさん」と呼んでいる。昭和55年の耕地整理以前には、三本の大杉が生えていたが、昭和56年に「野の大神」の石標を建立した。

野の大神のまつりは、8月7日に氏子総代一人が酒一升とマクワ瓜を持って参詣するだけで

ある。周辺集落の野神まつりには、惣中の男性が参詣して子供相撲を奉納するが、この野の神まつりには、子供相撲を行った伝承はない。

嫁取り橋の伝説

昔、信州のさる大名のお姫様が、伊賀のさる大名の若君様に嫁入りする道中、吉住池にさしかかった。お姫様が輿の中から池の畔りを見ると、一頭の牛が水辺で池の水を飲んでいる姿が見えた。お姫様は、にわかにのどの乾きを訴え、輿から降りて、吉住池の水を飲もうと石橋の上から身を乗り出すと、お姫様の体が池の中に吸い込まれて水中に没してしまった。側に居た女従者が手をさしのべて助けようとしたら、女従者も池の中に沈んでしまった。しばらくして黒雲天空を覆い、雷光雷鳴激しくなったかと思うと、お姫様の姿も、女従者の姿も大蛇に変り天上へと舞い上った。

この事件があつて以来、嫁入道中には吉住池をさけて通るようになったとき。

(昭和24年春 建部日吉 故畠九右衛門より取材の話)

吉住池の漁法

吉住池には「どんじょふみ」と呼ぶ珍らしい漁法がある。

どんじょふみ漁法とは、大きな竹籠(かご)を水中に沈め、足で魚を竹籠の中に追い込んで攃い(すくい)上げて捕獲するもので、近郊では見られない吉住池独特の漁法である。

「どんじょふみ」と呼んでいる竹籠は、長楕円形の舟型で、長さ1間半、幅半間・深さ6尺漆塗りの竹籠で、口の所に二本の取手棒があって、この取手棒を握って籠を水中から攃い上げて魚をとる方法の漁具である。

この漁法は昭和40年代まで行っていたが、吉住池へ八日市市街地の汚水が多く入り、ヘドロの沈積が深まったので、どんじょふみ漁法は自然となくなつた。

このほかに「カイドリ」漁法がある。土石で水を囲み、囲みの中の水を汲み出して魚をとる方法。「ノド取り」という漁法もある。「ノド」という割り竹を編んで筒状の籠を作り、一方の口を閉じ、一方の口を漏斗状(じょうご)にした漁具を水中に沈め、ノドに入った魚を取る漁法である。

さらに「カキ」という漁法。投網。四手網。さで網。竿釣りなどの漁法もあるが、これらの漁法の時は、箱舟`たらい舟に乗つて行った。

吉住池に生息する魚類は、コイ・フナ・ヒラ(ハイ)・アマゴ・ゼゼラモロコ・タモロコ・ホンモロコ・ボテジャコ・ナマズ・ウナギ・ドジョウ・アカゲ・オイカワ・アユモドキ・ハリヨ・メダカ・モツゴ・タイワンドジョウ・カネヒラ・アブラボテ・ボテ(シロヒレタビラ)・カマツカ・ムギツク(ムギモロコ)・ヨシノボリ・ドンコ・スナヤツメウナギなどの淡水魚である。

吉住池でとれる魚は、味よくて骨が軟かいといわれている。また、周辺集落では家の前の小川にイケスを設けてあり、捕獲した鯉・フナが飼われて必要に応じて食卓に供したほか、吉住

池の普請や川普請には、これらの魚をとて直会の酒の肴にしていたと語られる。

今は、吉住池の湧水現象がなくなり、水も枯渇したため、魚は住んでなく、地元民は、吉住池の復活を持ち望んでいる。

(三露俊男)

聴取り者（敬称略）

神崎郡五個荘町大字伊野部 582番地 北川伝右衛門 大正6年5月8日生

八日市市建部日吉町 676番地 寺井秀治郎 明治41年5月16日生

寺井やえ 明治42年7月29日生

八日市市建部下野町 241番地 高木長兵衛 大正2年3月31日生

参考文献

八日市郷土文化研究会発刊 蒲生野1号・17号・18号の拙稿「郷土の民俗」